

## 七

寒い。手拭を下げて、湯壺へ下る。

三畳へ着物を脱いで、段々を、四つ下りると、八畳ほどの風呂場へ出る。石に不自由せぬ国と見えて、下は御影<sup>ミカゲ</sup>で敷き詰めた、真中を四尺ばかりの深さに掘り抜いて、豆腐屋ほどの湯槽<sup>ユフネ</sup>を据える。槽とは云うもののやはり石で畳んである。鉱泉と名のつく以上は、色々な成分を含んでいるのだろうが、色が純透明だから、入り心地がよい。折々は口にさえふくんで見るが別段の味も臭もない。病気にも利くそうだが、聞いて見ぬから、どんな病に利くのか知らぬ。もとより別段の持病もないから、実用上の価値はかつて頭のなかに浮んだ事がない。ただ這入る度に考え出すのは、白楽天の

オンセン ミズナメラカニシテ ギョウシヲアラウ

温泉水滑洗凝脂と云う句だけである。温泉と云う名を聞けば必ずこの句にあらわれたような愉快的な気持ちになる。またこの気持ちを出し得ぬ温泉は、温泉として全く価値がないと思ってる。この理想以外に温泉についての注文はまるでない。

すぼりと浸かると、乳のあたりまで這入る。湯はどこから湧いて出るか知らぬが、常でも槽の縁を奇麗に越している。春の石は乾くひまなく濡れて、あたたかに、踏む足の、心は穏やかに嬉しい。降る雨は、夜の目を掠<sup>カス</sup>めて、ひそかに春を潤<sup>ウル</sup>おすほどのしめやかさであるが、軒のしずくは、ようやく繁く、ぽたり、ぽたりと耳に聞える。立て籠められた湯気は、床から天井を隈なく埋めて、隙間さえあれば、節穴の細きを厭わず洩れ出でんとする景色である。

秋の霧は冷やかに、たなびく霧<sup>モヤ</sup>は長閑<sup>ノドカ</sup>に、夕餉<sup>ユウゲタ</sup>炊く、人の煙は青く立って、大いなる空に、わがはかなき姿を托す。様々の憐れはあるが、春の夜の温泉の曇りばかりは、浴するものの肌を、柔らかにつつんで、古き世の男かと、われを疑わしむる。眼に写るものの見えぬほど、濃くまつわりはせぬが、薄絹を一重破れば、何の苦もなく、下界の人と、己れを見出すように、浅きものではない。一重破り、二重破り、幾重を破り尽すともこの煙りから出す事はならぬ顔に、四方よりわれ一人を、温かき虹の中に埋め去る。酒に酔うと云う言葉はあるが、煙りに酔うと云う語句を耳にした事がない。あるとすれば、霧には無論使えぬ、霞には少し強過ぎる。ただこの霧<sup>モヤ</sup>に、春宵<sup>シュンショウ</sup>の二字を冠したるとき、始めて妥当なるを覚える。

余は湯槽<sup>ユフネ</sup>のふちに仰向<sup>アオムケ</sup>の頭を支えて、透き徹<sup>トオ</sup>る湯のなかの軽き身体<sup>カロカラダ</sup>を、出来るだけ抵抗力なきあたりへ漂<sup>タダヨ</sup>わして見た。ふわり、ふわりと魂がくらげのように浮いている。世の中もこんな気になれば楽なものだ。分別<sup>シュウジャク</sup>の錠前<sup>シンバリ</sup>を開けて、執着<sup>シツジャク</sup>の栓張<sup>シンバリ</sup>をはずす。どうともせよと、湯泉のなかで、湯泉と同化してしまう。流れるものほど生きるに苦は入らぬ。流れるもののなかに、魂まで流していれば、基督<sup>キリスト</sup>の御弟子となったよりありがたい。なるほどこの調子で考えると、土左衛門は風流である。スウィンバーンの何とか云う詩に、女が水の底で往生して嬉しがっている感じを書いてあったと思う。

※スウィンバーン(1837～1909)＝ヴィクトリア朝のイングランドの詩人

余が平生から苦にしていた、ミレーのオフエリヤも、こう観察するとだいぶ美しくなる。何であんな不愉快な所を扱んだものかと今まで不審に思っていたが、あれはやはり画になるのだ。水に浮んだまま、あるいは水に沈んだまま、あるいは沈んだり浮ん

だりしたまま、ただそのままの姿で苦なしに流れる有様は美的に相違ない。それで兩岸にいろいろな草花をあしらって、水の色と流れて行く人の顔の色と、衣服の色に、落ちついた調和をとったなら、きっと画になるに相違ない。しかし流れて行く人の表情が、まるで平和ではほとんど神話か比喻になってしまう。痙攣的な苦悶はもとより、全幅の精神をうち壊わすが、全然色気のない平気な顔では人情が写らない。どんな顔をかいたら成功するだろう。ミレーのオフエリヤは成功かも知れないが、彼の精神は余と同じところに存するか疑わしい。ミレーはミレー、余は余であるから、余は余の興味を以て、一つ風流な土左衛門をかいて見たい。しかし思うような顔はそうたやすく心に浮んで来そうもない。

湯のなかに浮いたまま、今度は土左衛門の<sup>サン</sup>贄を作って見る。

雨が降ったら濡れるだろう。

霜が下りたら冷たかろ。

土のしたでは暗かろう。

浮かば波の上、沈まば波の底、春の水なら苦はなかる。

と口のうちに小声に誦<sup>ジュ</sup>しつつ漫然<sup>マンゼン</sup>と浮いていると、どこかで弾<sup>ヒ</sup>く三味線の音<sup>ネ</sup>が聞える。美術家だのにと云われると恐縮するが、実のところ、余がこの楽器における智識はすこぶる怪しいもので二が上がりうが、三が下がりうが、耳には余り影響を受けた試しがない。しかし、静かな春の夜に、雨さえ興を添える、山里の湯壺の中で、魂まで春の<sup>テ</sup>温泉<sup>ユ</sup>に浮かしながら、遠くの三味を無責任に聞くのははなはだ嬉しい。遠いから何を唄って、

何を弾いているか無論わからない。そこに何だか趣がある。音色の落ちついているところから察すると、上方の<sup>ケンギョウ</sup>検校さんの地唄にでも聴かれそうな<sup>フトザオ</sup>太棹かとも思う。

小供の時分、門前に<sup>ヨロズヤ</sup>万屋と云う酒屋があつて、そこに<sup>オクラ</sup>御倉さんと云う娘がいた。この御倉さんが、静かな春の昼過ぎになると、必ず長唄の<sup>オサラ</sup>御浚いをする。御浚が始まると、余は庭へ出る。茶畠の十坪余りを前に控えて、三本の松が、客間の東側に並んでいる。この松は周り一尺もある大きな樹で、面白い事に、三本寄って、始めて趣のある恰好を形つくっていた。小供心にこの松を見ると好い心持になる。松の下に黒くさびた<sup>カナトウロウ</sup>鉄灯籠が名の知れぬ赤石の上に、いつ見ても、わからず屋の<sup>カタクナナジイ</sup>頑固爺のようにかたく坐っている。余はこの灯籠を見詰めるのが大好きであつた。灯籠の前後には、苔深き地を<sup>ス</sup>抽いて、名も知らぬ春の草が、浮世の風を知らぬ顔に、独り匂うて独り楽しんでいる。余はこの草のなかに、わずかに膝を容るるの席を見出して、じっと、しゃがむのがこの時分の癖であつた。この三本の松の下に、この灯籠を覗めて、この草の香を臭いで、そうして御倉さんの長唄を遠くから聞くのが、当時の日課であつた。

御倉さんはもう赤い<sup>テガラ</sup>手絡の時代さえ通り越して、だいぶんと世帯じみた顔を、帳場<sup>サラ</sup>へ曝してるだろう。 ※手絡＝日本髪を結う際に、<sup>マゲ</sup>髻に巻きつけるなどして飾る布

<sup>ムコ</sup>鴉とは折合がいいか知らん。<sup>ツバクロ</sup>燕は年々帰って来て、泥を<sup>フク</sup>啣んだ<sup>クチバシ</sup>嘴を、いそがしげに働かしているか知らん。燕と酒の香とはどうしても想像から切り離せない。

三本の松はいまだに好い恰好で残っているかしらん。鉄灯籠はもう壊れたに相違ない。春の草は、昔し、しゃがんだ人を覚えているだろうか。その時ですら、口もきか

ずに過ぎたものを、今に見知ろうはずがない。御倉さんの旅の衣は鈴懸のと云う、日ごとの声もよも聞き覚えがあるとは云うまい。

※旅の衣は鈴懸の・・・=旅といえば有名な長唄勸進帳の出だし

三味<sup>シヤミ</sup>の音<sup>ネ</sup>が思わぬパノラマを余の眼前<sup>ガンゼン</sup>に展開するにつけ、余は床<sup>ユカ</sup>しい過去<sup>マ</sup>のあたりに立って、二十年の昔に住む、頑是<sup>ガンゼ</sup>なき小僧と、成り済ましたとき、突然風呂場の戸がさらりと開いた。 ※頑是=分別

誰か来たかと、身を浮かしたまま、視線だけを入口に注ぐ。湯槽の縁の最も入口から、隔たりたるに頭を乗せているから、槽<sup>フネ</sup>に下る段々は、間<sup>アイダ</sup>二丈を隔てて斜めに余が眼に入る。しかし見上げた余の瞳にはまだ何物も映らぬ。 ※二丈=約6m

しばらくは軒<sup>メグ</sup>を遶<sup>アマダレ</sup>る雨垂<sup>マ</sup>の音のみが聞える。三味線はいつの間にかやんでいた。

やがて階段の上に何物かあらわれた。広い風呂場を照すものは、ただ一つの小さき釣り洋灯<sup>ランプ</sup>のみであるから、この隔りでは澄切った空気を控えてさえ、確<sup>シカ</sup>と物色はむずかしい。まして立ち上がる湯気の、濃<sup>コマヤ</sup>かなる雨に抑えられて、逃場を失いたる今宵の風呂に、立つを誰とはもとより定めにくい。一段を下り、二段を踏んで、まともに、照らす灯影<sup>ホカゲ</sup>を浴びたる時でなくては、男とも女とも声は掛けられぬ。

黒いものが一步を下へ移した。踏む石は天鷲<sup>ビロウド</sup>毬のごとく柔かと見えて、足音<sup>シヨウ</sup>を証にこれを律すれば、動かぬと評しても差支ない。が輪廓は少しく浮き上がる。余は画工だけあって人体の骨格については、存外視覚が鋭敏である。何とも知れぬものの一段動いた時、余は女と二人、この風呂場の中に在る事<sup>サト</sup>を覚った。

注意をしたものか、せぬものかと、浮きながら考える間に、女の影は遺憾なく、余が前に、早くもあらわれた。漲ミナぎり渡る湯煙りの、やわらかな光線を一分子フンシごとに含んで、薄紅ウスクレナイの暖かに見える奥に、濛タダヨわす黒髪を雲とながして、あらん限りの背丈セタケを、すらりと伸ノした女の姿を見た時は、礼儀の、作法の、風紀のと云う感じはことごとく、わが脳裏を去って、ただひたすらに、うつくしい画題を見出し得たとのみ思った。

古代希臘ギリシャの彫刻はいざ知らず、今世仏国キンセイフツコクの画家が命と頼む裸体画を見るたびに、あまりに露骨アカラサマな肉の美を、極端まで描がき尽そうとする痕迹コンセキが、ありありと見えるので、どこことなく気韻キインに乏トボしい心持が、今までわれを苦しめてならなかった。しかしその折々はただどこことなく下品だと評するまでで、なぜ下品であるかが、解らぬ故、吾知らず、答えを得るに煩悶して今日に至ったのだろう。肉を蔽オオえば、うつくしきものが隠れる。かくさねば卑イヤしくなる。今の世の裸体画と云うはただかくさぬと云う卑しさに、技巧を留めておらぬ。衣を奪ハダカいたる姿を、そのままに写すだけにては、物足らぬと見えて、飽くまでも裸体ハダカを、衣冠の世に押し出そうとする。服をつけたるが、人間の常態なるを忘れて、赤裸ジュウブンにすべての権能を附与せんと試みる。十分で事足るべきを、十二分にも、十五分にも、どこまでも進んで、ひたすらに、裸体であるぞと云う感じを強く描出しようとする。技巧がこの極端に達したる時、人はその観者カンジャを強シうるを陋ロウとする。

※陋ロウ＝見識が狭いこと、心が卑しいこと

うつくしきものを、いやが上に、うつくしくせんと焦せるとき、うつくしきものはかえってその度を減ずるが例である。人事についても満は損を招くとの諺はこれがためである。

放心と無邪気とは余裕を示す。余裕は画において、詩において、もしくは文章において、<sup>ヒッスウ</sup>必須の条件である。現代<sup>キンダイ</sup>芸術の一大弊<sup>ヘイトウ</sup>竇は、いわゆる文明の潮流が、いたずらに芸術の士を駆<sup>ク</sup>って、拘々として随処に<sup>アクソク</sup>齷齪たらしむるにある。

※弊<sup>ヘイトウ</sup>竇=欠陥    ※拘々として=物事にこだわって    ※齷齪<sup>アクソク</sup>=あくせく=細かいことを気にして落ち着かない

裸体画はその好例であろう。都会に<sup>ゲイギ</sup>芸妓と云うものがある。色を売<sup>ケ</sup>りて、人に媚<sup>メ</sup>びるを商売<sup>シヤウライ</sup>にしている。彼らは<sup>ヒョウカク</sup>嫖客に対する時、わが容姿のいかに相手の<sup>ヒトミ</sup>瞳子に映<sup>ウツ</sup>ずるかを顧慮<sup>コロ</sup>するのほか、何らの表情をも<sup>ヒョウカク</sup>發揮し得ぬ。    ※嫖客=遊客、遊び人

年々に見るサロンの目録はこの芸妓に似たる裸体美人を以て充満している。彼らは一秒時も、わが裸体なるを忘るる<sup>アタ</sup>能<sup>ノ</sup>わざるのみならず、全身の筋肉をむずつかして、わが裸体なるを<sup>ツ</sup>観者に示さんと力<sup>チカラ</sup>めている。

今余が面前に<sup>ヒョウテイ</sup>娉婷と現<sup>ア</sup>われたる姿には、一塵もこの<sup>ソクアイ</sup>俗埃の眼に<sup>サエ</sup>遮<sup>サ</sup>ぎるものを帯びておらぬ。常の人の<sup>マト</sup>纏<sup>マ</sup>える<sup>イショウ</sup>衣装を脱ぎ捨てたる<sup>サマ</sup>様と云<sup>イハ</sup>えばすでに<sup>ニンガイ</sup>人界に<sup>ダザイ</sup>墮<sup>オ</sup>在する。始めより着るべき服も、振るべき袖も、あるものと知らざる神代の姿を雲のなかに呼び起したるがごとく自然である。    ※娉婷<sup>ヒョウテイ</sup>=(婦人の姿や振る舞いが)優美な、美しい

室を埋むる湯煙は、埋めつくしたる後から、絶えず湧き上がる。春の夜の灯を半透明に崩し<sup>ク</sup>拈<sup>ニ</sup>げて、部屋一面の<sup>ニジ</sup>虹霓の世界が<sup>コマヤ</sup>濃かに揺れるなかに、<sup>モウロウ</sup>朦朧と、黒きかとも思<sup>オモ</sup>わるほどの髪を<sup>ボカ</sup>暈<sup>ハ</sup>して、真白な姿が雲の底から次第に浮き上がって来る。その輪廓を見よ。

<sup>クビスジ</sup>頸筋を<sup>カロ</sup>軽く内輪に、双方から責めて、苦もなく肩の方へなだれ落ちた線が、豊かに、丸く折れて、流るる末は五本の指と<sup>ワカ</sup>分れるのであろう。ふっくらと浮く二つの乳の下

には、しばし引く波が、また滑らかに盛り返して下腹の張りを安らかに見せる。張る勢を後ろへ抜いて、勢の尽くるあたりから、分れた肉が平衡を保つために少しく前に傾く。逆に受くる膝頭のこのたびは、立て直して、長きうねりの踵<sup>カカト</sup>につく頃、平たき足が、すべての葛藤を、二枚の蹠<sup>アシノウラ</sup>に安々と始末する。世の中にこれほど錯雑<sup>サクザツ</sup>した配合はない、これほど統一のある配合もない。これほど自然で、これほど柔らかで、これほど抵抗の少い、これほど苦にならぬ輪廓は決して見出せぬ。

しかもこの姿は普通の裸体のごとく露骨に、余が眼の前に突きつけられてはおらぬ。すべてのものを幽玄に化す一種の靈氣<sup>レイファン</sup>のなかに髻<sup>ホウフツ</sup>として、十分の美を奥床<sup>オクユカ</sup>しくもほのめかしているに過ぎぬ。片鱗<sup>ハツボクリンリ</sup>を澆墨淋漓<sup>アイダ</sup>の間に点じて、虬竜<sup>キョウリョウ</sup>の怪を、楮毫<sup>チョゴウ</sup>のほかに想像せしむるがごとく、芸術的に観じて申し分のない、空気と、あたたかみと、冥邈<sup>メイバク</sup>なる調子とを具えている。

<sup>レイファン</sup>  
※靈氣＝靈気 ※澆墨淋漓＝水墨山水画などで、筆にたっぷり墨を含ませて奔放に勢いよく描くさま

<sup>キョウリョウ</sup>      <sup>チョゴウ</sup>      <sup>メイバク</sup>  
※虬竜＝角のある竜の一種      ※楮毫＝紙と筆      ※冥邈＝暗くて遠く、はっきり見えないさま

六々三十六鱗を丁寧<sup>ジョウシヤシヤ</sup>に描きたる竜の、滑稽に落つるが事実ならば、赤裸々の肉を淨洒々に眺めぬうちに神往の余韻はある。 ※淨洒々＝煩惱妄想がなく清らかで一点の汚れもない

余はこの輪廓の眼に落ちた時、桂の都を逃れた月界の嫦娥<sup>ジョウガ</sup>が、彩虹<sup>ニジ</sup>の追手に取り囲まれて、しばらく躊躇する姿と眺めた。 ※神往＝思いを馳せる

※嫦娥＝中国神話：仙女、不死の薬を盗んで飲み、月に逃げた。道教では月神として中秋節に祀っている。

輪廓は次第に白く浮きあがる。今一步を踏み出せば、せつかくの嫦娥が、あわれ、俗界に墮落するよと思う刹那に、緑の髪は、波を切る<sup>レイキ</sup>靈龜の尾のごとくに風を起して、<sup>ボウ ナビ</sup>莽と靡いた。<sup>ウスマ</sup>渦捲く煙りを<sup>ツンザ</sup>劈いて、白い姿は階段を飛び上がる。

<sup>レイキ</sup>※靈龜=古代中国神話の四靈(麒麟、鳳凰、靈龜、応竜)の一つ。甲羅の上に蓬莱山を背負った巨大な亀

ホホホホと鋭どく笑う女の声が、廊下に響いて、静かなる風呂場を次第に<sup>ムコウ トオノ</sup>向へ遠退く。余はがぶりと湯を呑んだまま<sup>フネ</sup>槽の中に<sup>ツツタ</sup>突立つ。驚いた波が、胸へあたる。縁を越す湯泉の音がさあさあと鳴る。

## 八

御茶の御馳走になる。<sup>アイキヤク</sup>相客は僧一人、<sup>カンカイジ</sup>觀海寺の和尚で名は大徹と云うそうだ。<sup>ソク</sup>俗一人、二十四五の若い男である。

老人の部屋は、余が<sup>シツ</sup>室の廊下を右へ突き当って、左へ折れた行き留りにある。<sup>オオキ</sup>大きさは六畳もあろう。大きな紫檀の机を真中に据えてあるから、思ったより狭苦しい。それへと云う席を見ると、布団の代りに<sup>カタン</sup>花毯が敷いてある。無論支那製だろう。真中を六角に仕切って、妙な家と、妙な柳が織り出してある。<sup>マワリ</sup>周囲は鉄色に近い藍で、四隅に唐草の模様を飾った茶の輪を染め抜いてある。支那ではこれを座敷に用いたものか疑わしいが、こうやって布団に代用して見るとすこぶる面白い。印度の更紗とか、ペルシャの壁掛とか号するものが、ちょっと間が抜けているところに価値があるごとく、

この花毯もこせつかないところに趣がある。花毯ばかりではない、すべて支那の器具は皆抜けている。どうしても馬鹿で気の長い人種の発明したものとほか取れない。見ているうちに、ぼおっとするところが尊トオとい。日本は巾着切りの態度で美術品を作る。西洋は大きくて細かくて、そうしてどこまでも娑婆シャバツケ気がとれない。まずこう考えながら席に着く。若い男は余とならんで、花毯の半ナカバを占領した。

和尚は虎の皮の上へ坐った。虎の皮の尻尾が余の膝ヒザの傍を通り越して、頭は老人の臀シリの下に敷かれている。老人は頭の毛をことごとく抜いて、頬と顎へ移植したように、白い髯ヒゲをむしゃむしゃと生ハやして、茶托へ載せた茶碗を丁寧に机の上へならべる。

「今日は久し振りで、うちへ御客が見えたから、御茶を上げようと思って、……」と坊さんの方を向くと、

「いや、御使オツカイをありがとう。わしも、だいぶ御無沙汰をしたから、今日ぐらい来て見ようかと思っところじゃ」と云う。この僧は六十近い、丸顔の、達磨を草書に崩したような容貌を有している。老人とは平常フダンからの昵懇ジツコンと見える。

「この方カタが御客さんかな」

老人は首肯ウナスキながら、朱泥シュデイの急須から、緑を含む琥珀色コハクイロの玉液ギョクエキを、二三滴ずつ、茶碗の底へしたたらす。清い香りがかすかに鼻オソを襲う気分がした。

「こんな田舎に一人では御淋しかろ」と和尚はすぐ余に話しかけた。

「はああ」となんともかとも要領を得ぬ返事をする。淋サビしいと云えば、偽りである。淋しからずと云えば、長い説明が入る。

「なんの、和尚さん。このかたは画<sup>エ</sup>を書かれるために来られたのじゃから、御忙<sup>オイツ</sup>がし  
いくらいじゃ」

「おお左様か、それは結構だ。やはり南宗派<sup>ナンソウハ</sup>かな」

「いいえ」と今度は答えた。西洋画だなどと云っても、この和尚にはわかるまい。

「いや、例の西洋画じゃ」と老人は、主人役に、また半分引き受けてくれる。

「ははあ、洋画か。すると、あの久一<sup>キウイチ</sup>さんのやられるようなものかな。あれは、わし  
この間始めて見たが、随分奇麗にかけたのう」

「いえ、詰らんものです」と若い男がこの時ようやく口を開いた。

「御前何ぞ和尚さんに見ていただいたか」と老人が若い男に聞く。言葉から云うても、  
様子から云うても、どうも親類らしい。

「なあに、見ていただいたんじゃないですが、鏡<sup>カガミ</sup>が池<sup>イケ</sup>で写生しているところを和尚さ  
んに見つけたのです」

「ふん、そうか——さあ御茶<sup>ツ</sup>が注げたから、一杯」と老人は茶碗<sup>メイメイ</sup>を各自の前に置く。

茶の量は三四滴に過ぎぬが、茶碗はすこぶる大きい。生壁色<sup>ナマカベイロ</sup>の地へ、焦げた丹<sup>コ</sup>と、薄  
い黄<sup>キ</sup>で、絵だか、模様だか、鬼の面の模様になりかかったところか、ちょっと見当の  
つかないものが、べたに描<sup>カ</sup>いてある。 ※生壁色＝茶色がかったねずみ色 ※丹＝辰砂、赤

「奎兵衛<sup>モクベエ</sup>です」と老人が簡単に説明した。

「これは面白い」と余も簡単に賞<sup>ホ</sup>めた。

「奎兵衛はどうも偽物が多くて、——その糸底<sup>イトソコ</sup>を見て御覧なさい。銘があるから」と  
云う。

取り上げて、障子の方へ向けて見る。障子には植木鉢の葉蘭<sup>ハラシ</sup>の影が暖かそうに写っている。首を曲げて、覗き込むと、壺<sup>モウ</sup>の字が小さく見える。銘は観賞の上において、さのみ大切のものとは思わないが、好事者<sup>コウズシヤ</sup>はよほどこれが気にかかるそうだ。茶碗を下へ置かないで、そのまま口へつけた。濃く<sup>アマ</sup>甘く、湯加減に出た、重い露を、舌の先へ一しずくずつ落<sup>アジワ</sup>して味<sup>カンジンテキイ</sup>って見るのは閑人<sup>インジ</sup>適意の韻事である。

※閑人適意の韻事＝ひま人が自分の好きなようにする遊び

普通の人<sup>ゼットウ</sup>は茶を飲むものと心得ているが、あれは間違だ。舌頭<sup>ノ</sup>へぽたりと載せて、清いものが四方へ散れば<sup>ノド</sup>咽喉<sup>クダ</sup>へ下るべき液はほとんどない。ただ馥郁<sup>フクイク</sup>たる匂<sup>ニオイ</sup>が食道から胃のなかへ沁み渡るのみである。 ※馥郁＝いい香り

歯を用いるは卑しい。水はあまりに軽い。玉露に至っては濃<sup>コマヤ</sup>かなる事、淡水<sup>キョウ</sup>の境を脱して、顎<sup>アゴ</sup>を疲らすほどの硬さを知らず。結構な飲料である。眠られぬと訴うるものあれば、眠られぬも、茶を用いよと勧めたい。

老人はいつの間にやら、青玉<sup>セイギョク</sup>の菓子皿を出した。大きな塊を、かくまで薄く、かくまで規則正しく、削りぬいた匠人<sup>ショウジン</sup>の手際<sup>テギワ</sup>は驚ろくべきものと思う。すかして見ると春の日影は一面に射<sup>サ</sup>し込んで、射し込んだまま、逃<sup>ノ</sup>がれ出<sup>イ</sup>ずる路<sup>ミチ</sup>を失ったような感じである。中には何も盛らぬがいい。

「御客さんが、青磁<sup>ホ</sup>を賞められたから、今日はちとばかり見せようと思うて、出しておきました」

「どの青磁を――うん、あの菓子鉢かな。あれは、わしも好<sup>スキ</sup>じゃ。時にあなた、西洋画<sup>フスマ</sup>では襖などはかけんものかな。かけるなら一つ頼<sup>タカ</sup>みたいがな」

かいてくれなら、かかぬ事もないが、この和尚の気に入るか入らぬかわからない。

せっかく骨を折って、西洋画は駄目だなどと云われては、骨の折榮<sup>オリバエ</sup>がない。

「襖には向かないでしょう」

「向かんかな。そうさな、この間の久一<sup>アイダ キュウイチ</sup>さんの画<sup>エ</sup>のようじゃ、少し派手過ぎるかも知れん」

「私のは駄目です。あれはまるでいたずらです」と若い男はしきりに、恥かしがって謙遜<sup>ケンソン</sup>する。

「その何とか云う池はどこにあるんですか」と余は若い男に念のため尋ねて置く。

「ちょっと観海寺の裏の谷の所で、幽邃<sup>ユウスイ</sup>な所です。——なあに学校にいる時分、習ったから、退屈まぎれに、やって見ただけです」 ※幽邃 = 景色などが奥深く静かなこと

「観海寺と云うと……」

「観海寺と云うと、わしのいる所じゃ。いい所じゃ、海を一目<sup>ヒトメ</sup>に見下<sup>ミオロ</sup>しての——まあ逗留<sup>トウリュウ</sup>中にちょっと来て御覧。なに、ここからはつい五六丁よ。あの廊下から、そら、寺の石段が見えるじゃろうが」 ※五六丁 = 約5～600m

「いつか御邪魔<sup>アガ</sup>に上ってもいいですか」

「ああいいとも、いつでもいる。ここの御嬢さんも、よう、来られる。——御嬢さんと云えば今日は御那美<sup>オナミ</sup>さんが見えんようだが——どうかされたかな、隠居さん」

「どこぞへ出ましたかな、久一、御前の方へ行きはせんかな」

「いいや、見えません」

「また独り散歩かな、ハハハハ。御那美さんはなかなか足が強い。この間アイダ法用でトナミ礪並  
まで行ったら、スガタミバシ姿見橋の所で——どうも、善く似とると思ったら、御那美さんよ。尻  
をハシヨ端折って、ソウリ草履ハを穿いて、和尚さん、何をぐずぐず、どこへ行きなされると、いきな  
り、驚ろかされたて、ハハハハ。御前はそんなナリ形姿でジタイ地体どこへ、行ったのぞいと聴  
くと、今セリツ芹摘みに行った戻りじゃ、和尚さん少しやろうかと云うて、いきなりわしのタモト袂  
へ泥だらけの芹を押し込んで、ハハハハハ」

「どうも、……」と老人は苦笑いをしたが、急に立って「実はこれを御覧に入れるつ  
もりで」と話をまた道具の方へそらした。

老人がシタン紫檀の書架から、ウヤウヤ恭しく取り下オロしたモンドンス紋緞子の古い袋は、何だか重そうなも  
のである。 ※紋緞子=光沢のある白生地の絹織物

「和尚さん、あなたには、御目に懸カけた事があったかな」

「なんじゃ、一体」

スズリ  
「硯よ」

「へえ、どんな硯かい」

サンヨウ  
「山陽の愛蔵したと云う……」 ※山陽=頼山陽=江戸時代後期の歴史家、漢詩人、文人

「いいえ、そりゃまだ見ん」

シュンスイ フタ  
「春水の替え蓋がついて……」 ※春水=頼春水=頼山陽の父、儒学者、詩人

「そりゃ、まだのようだ。どれどれ」

老人は大事そうに緞子の袋の口を解くと、アズキイロ小豆色の四角な石が、ちらりと角カドを見せ  
る。

「いい色合じゃのう。端溪かい」 ※端溪＝中国、広東省西部にある肇慶市南東の硯石の産地

「端溪で鳩鶴眼が九つある」 ※鳩鶴眼＝同心円がいくつも重なった目のような斑紋。珍重される。

「九つ？」と和尚大に感じた様子である。

「これが春水の替え蓋」と老人は綸子で張った薄い蓋を見せる。

※綸子＝紋織の染生地の一つ。経糸が長く浮いて光沢が美しく、光線の具合で紋様が見え隠れする。

上に春水の字で七言絶句が書いてある。

「なるほど。春水はようかく。ようかくが、書は杏坪の方が上手じゃて」

「やはり杏坪の方がいいかな」 ※杏坪＝頼杏坪＝頼春水の弟、歌人

「山陽が一番まずいようだ。どうも才子肌で俗気があって、いっこう面白くない」

「ハハハハ。和尚さんは、山陽が嫌いだから、今日は山陽の幅を懸け替えて置いた」

「ほんに」と和尚さんは後ろを振り向く。床は平床を鏡のようにふき込んで、鏽気を

吹いた古銅瓶には、木蘭を二尺の高さに、活けてある。 ※木蘭＝モクレン 二尺＝60cm

軸は底光りのある古錦襪に、装幀の工夫を籠めた物徂徠の大幅である。絹地ではないが、多少の時代がついているから、字の巧拙に論なく、紙の色が周囲のきれ地とよく

調和して見える。あの錦襪も織りたては、あれほどのゆかしさも無かったろうに、彩色

が褪せて、金糸が沈んで、華麗なところが滅り込んで、渋いところがせり出して、あ

んないい調子になったのだと思う。焦茶の砂壁に、白い象牙の軸が際立って、両方に

突張っている、手前に例の木蘭がふわりと浮き出されているほかは、床全体の趣は

落ちつき過ぎてむしろ陰気である。

「徂徠かな」と和尚が、首を向けたまま云う。 ※徂徠＝荻生徂徠＝江戸時代中期の儒学者

「徂徠もあまり、御好きでないかも知れんが、山陽よりは善かろうと思つて」

「それは徂徠の方が遙かにいい。享保頃の学者の字はまずくても、どこぞに品がある」

「広沢をして日本の能書ならしめば、われはすなわち漢人の拙なるものと云うたのは、  
徂徠だったかな、和尚さん」 ※細井広沢=江戸時代中期の儒学者 ※能書=文字を上手に描く人

「わしは知らん。そう威張るほどの字でもなくて、ワハハハハ」

「時に和尚さんは、誰を習われたのかな」

「わしか。禅坊主は本も読まず、手習もせんから、のう」

「しかし、誰ぞ習われたろう」

「若い時に高泉の字を、少し稽古した事がある。それぎりじゃ。それでも人に頼まれ  
ればいつでも、書きます。ワハハハハ。時にその端溪を一つ御見せ」と和尚が催促す  
る。 ※高泉=高泉性敦=江戸時代前期に中国の明から渡来した臨済宗黄檗派の僧

とうとう緞子の袋を取り除ける。一座の視線はことごとく硯の上に落ちる。厚さは  
ほとんど二寸に近いから、通例のもの倍はあろう。四寸に六寸の幅も長さもまず並  
と云ってよろしい。蓋には、鱗のかたに研ぎをかけた松の皮をそのまま用いて、上  
は朱漆で、わからぬ書体が二字ばかり書いてある。

「この蓋が」と老人が云う。「この蓋が、ただの蓋ではないので、御覧の通り、松の  
皮には相違ないが……」

老人の眼は余の方を見ている。しかし松の皮の蓋にいかなる因縁があろうと、画工  
として余はあまり感服は出来んから、

「松の蓋は少し俗ですな」

と云った。老人はまあと云わぬばかりに手を挙げて、

「ただ松の蓋と云うばかりでは、俗でもあるが、これはその何ですよ。山陽が広島におった時に庭に生えていた松の皮を剥いで山陽が手ずから製したのですよ」

なるほど山陽は俗な男だと思ったから、

「どうせ、自分で作るなら、もっと不器用に作れそうなものですな。わざとこの鱗のかたなどをぴかぴか研ぎ出さなくっても、よさそうに思われますが」と遠慮のないところを云って退けた。

「ワハハハハ。そうよ、この蓋はあまり安っぽいようだな」と和尚はたちまち余に賛成した。

若い男は気の毒そうに、老人の顔を見る。老人は少々不機嫌の体に蓋を払いのけた。下からいよいよ硯が正体をあらわす。

もしこの硯について人の眼を峙つべき特異の点があるとすれば、その表面にあらわれたる匠人の刻である。真中に袂時計ほどな丸い肉が、縁とすれすれの高さに彫り残されて、これを蜘蛛の背に象どる。中央から四方に向って、八本の足が彎曲して走ると見れば、先には各鳩鶴眼を抱えている。残る一個は背の真中に、黄な汁をしたたごごとく煮染んで見える。背と足と縁を残して余る部分はほとんど一寸余の深さに掘り下げてある。墨を湛える所は、よもやこの塹壕の底ではあるまい。たとい一合の水を注ぐともこの深さを充たすには足らぬ。思うに水盂の中から、一滴の水を銀杓にて、蜘蛛の背に落したるを、貴き墨に磨り去るのだろう。それでなければ、名は硯でも、その実は純然たる文房用の装飾品に過ぎぬ。

老人は涎<sup>ヨダレ</sup>の出そうな口をして云う。

「この肌合と、この眼<sup>ガン</sup>を見て下さい」

なるほど見れば見るほどいい色だ。寒く潤沢を帯びたる肌の上に、はっと、一息懸<sup>ヒトイキカ</sup>けたなら、直ちに凝<sup>イチダ</sup>って、一朵の雲を起すだろうと思われる。ことに驚くべきは眼の色である。眼の色と云わんより、眼と地<sup>アイマジ</sup>の相交わる所が、次第に色を取り替えて、いつ取り替えたか、ほとんど吾眼<sup>ワガメ アザム</sup>の欺<sup>アサム</sup>かれたるを見出し得ぬ事である。形容して見ると紫色<sup>ムシヨウカン</sup>の蒸羊羹の奥に、隠元豆<sup>ス</sup>を、透いて見えるほどの深さに嵌め込んだようなものである。眼と云えば一個二個でも大変に珍重される。九個と云ったら、ほとんど類はあるまい。しかもその九個が整然と同距離<sup>アンバイ</sup>に按排されて、あたかも人造のねりものと見違えられるに至ってはもとより天下の逸品をもって許さざるを得ない。

「なるほど結構です。観<sup>ミ</sup>て心持がいいばかりじゃありません。こうして触<sup>サフ</sup>っても愉快です」と云いながら、余は隣りの若い男に硯を渡した。

「久一<sup>キュウイチ</sup>に、そんなものが解るかい」と老人が笑いながら聞いて見る。久一君は、少々<sup>ヤケ</sup>自棄の気味で、

「分りゃしません」と打ち遣<sup>ヤ</sup>ったように云い放ったが、わからん硯を、自分の前へ置いて、眺めていては、もったいないと気がついたものか、また取り上げて、余に返した。余はもう一遍<sup>ベン</sup>丁寧<sup>ナ</sup>に撫<sup>ノチ</sup>で廻わした後、とうとうこれを恭<sup>ウヤウヤ</sup>しく禪師<sup>ゼンシ</sup>に返却した。

禪師はとくと掌<sup>テ</sup>の上で見済ました末、それでは飽き足らぬと考えたと見えて、鼠木綿<sup>ネズミメン</sup>の着物の袖を容赦なく蜘蛛の背へこすりつけて、光沢<sup>ツヤ</sup>の出た所をしきりに賞翫<sup>ショウガン</sup>している。

「隠居さん、どうもこの色が実に善<sup>ヨ</sup>いな。使うた事があるかの」

「いや、滅多には使いとう、ないから、まだ買うたなりじゃ」

「そうじゃろ。こないなのは支那でも珍らしかろうな、隠居さん」

「左様」

「わしも一つ欲しいものじゃ。何なら久一さんに頼もうか。どうかな、買って来ておくれかな」

「へへへへ。<sup>スズリ</sup>硯を見つけないうちに、死んでしまいそうです」

「本当に硯どころではないな。時にいつ御立ちか」

「<sup>ニサンチ</sup>二三日うちに立ちます」

「隠居さん。吉田まで送って御やり」

「普段なら、年は取っとるし、まあ見合すところじゃが、ことによると、もう逢えんかも、知れんから、送ってやろうと思うております」

「御伯父<sup>オジ</sup>さんは送ってくれんでもいいです」

若い男はこの老人の甥<sup>オイ</sup>と見える。なるほどどこか似ている。

「なあに、送って貰うがいい。川船<sup>カワフネ</sup>で行けば訳はない。なあ隠居さん」

「はい、山越<sup>ヤマゴシ</sup>では難義だが、廻り路でも船なら……」

若い男は今度は別に辞退もしない。ただ黙っている。

「支那の方へおいでですか」と余はちょっと聞いて見た。

「ええ」

ええの二字では少し物足らなかつたが、その上掘って聞く必要もないから控えた。

障子<sup>ショウジ</sup>を見ると、蘭<sup>ラン</sup>の影が少し位置を変えている。

「なあに、あなた。やはり今度の戦争で——これがもと志願兵をやったものだから、それで召集されたので」

老人は当人に代って、満洲の野に日ならず出征すべきこの青年の運命を余に語げた。この夢のような詩のような春の里に、啼くは鳥、落つるは花、湧くは温泉のみと思ひ詰めていたのは間違である。現実世界は山を越え、海を越えて、平家の後裔のみ住み古るしたる孤村にまで逼る。朔北の曠野を染むる血潮の何万分の一かは、この青年の動脈から迸る時が来るかも知れない。この青年の腰に吊る長き剣の先から煙りとなって吹くかも知れない。しかしてその青年は、夢みる事よりほかに、何らの価値を、人生に認め得ざる一画工の隣りに坐っている。耳をそばだつれば彼が胸に打つ心臓の鼓動さえ聞き得るほど近くに坐っている。その鼓動のうちには、百里の平野を捲く高き潮が今すでに響いているかも知れぬ。運命は卒然としてこの二人を一堂のうちに会したるのみにて、その他には何事をも語らぬ。